

首長に負うこと、負わないこと

ミクロネシア連邦ポーンパイ島にみる称号と負目

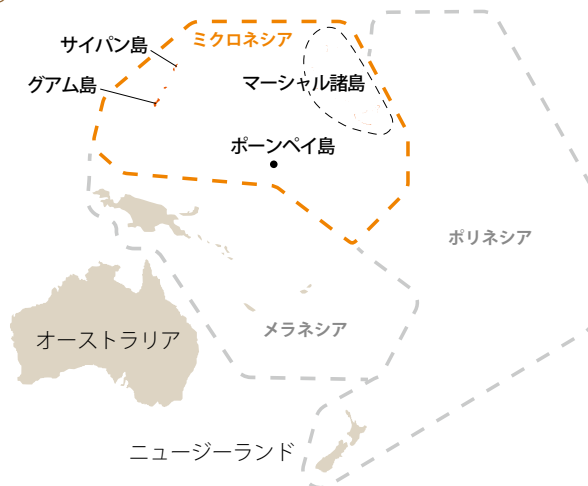
河野正治 かわの まさはる / 東京都立大学、AA研共同研究員

「首長に負う社会」として知られるミクロネシア連邦のポーンパイ島。島民は首長に何をどのように負うのか。その負い方にいかなる特徴があるのか。負債／負目という切り口から社会のしくみに迫りたい。



儀礼的な機会に使用される祭宴堂の光景。首長などの高位者は祭宴堂の奥間に着座し、軽食などの給仕を受ける。(2011年8月6日)

葬式の会場に一頭のブタを持参する島民の写真。称号保持者は儀礼的な機会に自らの財を供出することで、首長に貢献する義務を果たす。(2009年6月23日)



*写真はすべてポーンパイ島にて筆者撮影。

負目と忠誠

負債／負目に関する文化人類学の研究は、債権と債務をめぐる経済的関係にとどまらず、かならずしも経済的とはいえない「負うこと」の多様なありようを掘りあげてきた。金銭を介さない人間関係上の借りや貸し、立てられるべき義理、報いるべき恩といったものである。

文化人類学者は、こうした広義の「負うこと」を視野にいれることで、社会によって異なる人間関係の特徴を明らかにしてきた。そこで注目されたことのひとつが、何かを負う者とそれを負わせる者との不均衡な関係である。お世話になった人からの頼みごとを断ることが難しいように、ある人に何かを負う者は、一時的にせよ、その人よりも劣位の状態におかれる。

この優劣の関係が強固であれば、それは権力の基盤になる。主君から多大な恩義を負うことが主君へのゆるぎない忠誠を約束させる、いわば「御恩と奉公」の関係のように、負目はともすれば権力や不平等の発生をうながす。負債／負目という切り口は、二者間の「負うー負わせる」関係のみならず、社会のしくみ自体を理解することにもつながるのだ。

リーダーに負う社会と リーダーが負う社会

具体的な地域に舞台を移して、負債／負目と権力の問題にもう少し踏みこんでみよう。オセアニア島嶼部には二つの型の政治リーダーがいる。ポリネシアとミクロネシアに広くみられる首長は、固定的な役職をもち、出自や系譜などの条件により安定的な身分を保障されるリーダーである。それに対し、メラネシアにみられるビッグ・マンは文字どおりに「大物」であり、気前のよさや卓越した弁舌といった自らの個人的な技能によって、取り巻きへの影響力を強めながら競争を勝ちぬくリーダーである。

この二種類のリーダーのちがいは、公的な役職と個人的な影響力、生得的な地位と獲得的な地位、伝統的な政体と個人のカリスマといった対比からも説明できるように思える。ところが、島民との関係を抜きにして、これらのリーダーのあり方を十分に理解することはできない。特にだれがだれに負うのかという負目の方向から、それぞ

れのリーダーが周囲の人びとと取り結ぶ関係性を見ることによって、リーダーのあり方の本質的なちがいが見えてくるのだ。

ポリネシアやマイクロネシアの場合、首長のような「高貴な人物」から贈与を受けたという負目は、たとえ少量であっても、感謝してもし尽くせないほどの恩義となる。だからこそ、「御恩と奉公」の関係と同様に、島民は首長のために働いたり、食物を貢いだりする。これらの社会は「リーダーに負う社会」であり、島民が首長に負えば負うほど、首長の権力は強まる。

メラネシアの場合、ビッグ・マンは威信や名声をもつ一方、島民に貢納や労働を強いるような権力はもたない。むしろ彼がリーダーとしての栄光を長つづきさせるためには、周囲の協力者に気前よく富を分配し、影響力を保つ必要がある。あたかも地元からの支持を取りつけなければ当選できない議員のように、ビッグ・マンはみずからの威信を民衆に負う。まさしく「リーダーが負う社会」であり、首長がいる社会とは負目のベクトルが真逆になるのだ。

こうした負目の方向のちがいに注目すると、オセアニア島嶼部の諸社会は「リーダーに負う社会」と「リーダーが負う社会」に分類しなおせる。ピエール・クラストルが『政治人類学研究』（原毅彦訳、水声社、2020年）の中で述べるように、負債／負目という概念は「社会のありようを評価する際の確実な規準を提供する」（同書156頁）ツールであり、権力のありかたを見るうえで有用な切り口なのである。

記憶される称号

——ポーンペイ島にみる首長と負目

わたしが調査研究をしているマイクロネシア連邦のポーンペイ島は、上記の規準からすると「首長に負う社会」に分類できる。今日の同島には3万5千人ほどの住民が暮らしており、そのうちのかぎられた島民が首長の地位にある。具体的には、5人の最高首長のほか、それよりも下位の村首長が154人いる。成人男性のほとんどはそれぞれの首長から何らかの称号を授かっており、結婚した女性には夫に準じた称号が約束される。称号の位階は島民間の役割と序列を示し、それぞれに独自の名称がある。首長からの称号授与は、「ソウリック (Soulik)」や「クロウン (Kiroun)」といった第二の新たな名前を首長から授けられることでもある。

島民は称号を与えてくれた首長に恩義を感じ、その首長からの頼みに応じたり、首

長を主賓とする祭宴に協力したりするといった貢献を惜しまない。その逆に、こうした貢献をおこなわず、首長に負う意識が希薄だとみなされた島民は、当の首長から称号をはく奪される場合がある。称号をもたない島民は未婚女性と子どもくらいなので、称号を失うことは成人にとって屈辱的な出来事である。このように、首長から授けられる称号は、その島民と首長のあいだに「負う—負わせる」という関係が成り立っている証しなのである。

ところで、負債／負目の証しという観点から見たとき、称号は人の名前と同じように属人的な名称であるため、首長にたいする負目を確認できる物質的な証拠がない点に特徴がある。たしかに今日の同島では称号の情報を紙媒体や電子媒体で記録する者もいるが、それはごく一部にかぎられる。返済相手や返済額が正確に「記録」された借入書などと違って、称号の場合、だれがどの首長に負っているのかという情報の管理は、島民の日常的な「記憶」にかかっている。そのため、島民が互いの称号の名称を間違えて覚えていたり、称号を授与したかどうかで首長と島民が揉めたりすることもある。ある高齢の村首長が村人たちの称号をすっかり忘れてしまったときには、みなが肝を冷やしたほどだ。このように、称号をめぐる負目の内容は、あくまでも互いの「記憶」によって把握される。だからこそ、島民たちは日常と儀礼の双方で、口頭のコミュニケーションを通じて互いの称号を逐一確認しあう。

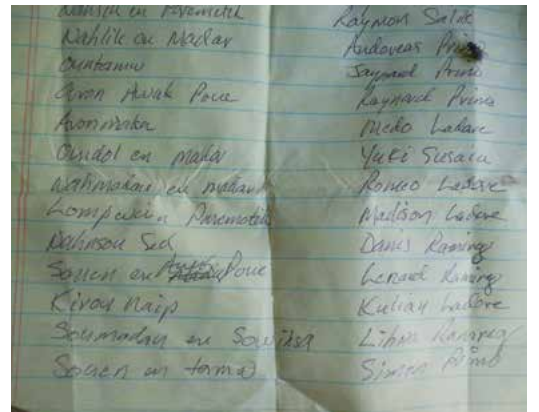
負目の内容が「記録」されないことは、首長との関係を見なおす余地を島民にあたえている。たとえば、ある男性はヤムイモの初物献上を毎年必ずおこなうなど、最高首長に貢献する一方で、島民のことを顧みない最高首長に不満をもっていた。そんな彼は自身のもつ称号について先代の最高首長からもらった大事な称号だと述べ、いまの最高首長にはあまり尽くしたくないと強調した。首長の代替わりにあたって称号が授与されなおすことはない。いまの最高首長に負うのか、先代に負うのかは、あくまでも島民側の解釈次第である。自身の記憶と解釈に応じて「だれに負うのか」を読み替える余地があるからこそ、島民は特定の首長に負いつづけるというわけでもなく、むしろみずからが負いたくないと思う首長との関係を組み替えることもできる。「記録」ではなく「記憶」によって負目が把握されるという称号の性質は、時に誤解や行き違いを生みつつも、島民が首長との関係を



会場にヤムイモが展示された「村の祭宴」の光景。村の称号を保持する住民たちが一堂に会して、村首長への感謝の気持ちを表明する機会である。(2012年10月6日)



最高首長にヤムイモの初物を献上するために用意されたバスケットの写真。称号保持者はその年はじめて収穫されたヤムイモやパンノキの実の初物を首長に献上する義務を負う。(2009年8月22日)



ある首長がノートに記録していた称号の情報。このような形で称号の情報を記録する者はごく一部に限られる。(2009年8月18日)

再構成する可能性をもたらすのである。

以上のように、負目の証しとしての称号の性質に注目することで、「首長に負う社会」の内実により深く迫ることができた。この短い記事で見てきたように、「だれがだれにどのように負うのか」という観点から人と人の関係の紡がれ方、ひいては社会のしくみを新たに理解しなおすこと、そこに負債／負目研究のひとつの醍醐味があるだろう。

